

第4次 原村総合計画



長野県原村



第4次 原村総合計画 目次

第1部 序論

第1章 計画策定の意義	1
第2章 計画の性格と役割	
1. 計画の構成と期間	2
2. 原村の概況	3

第2部 基本構想

第1章 むらづくりの基本理念	7
第2章 将来の指標	9
第3章 原村の将来像	13
第4章 村づくりの目標	14
第5章 施策の大綱	18
第1節 人と自然を大切にしたい住みよい村づくり	18
第2節 人と文化を育む村づくり	24
第3節 健康としあわせを誇れる福祉の村づくり	29
第4節 環境と共生した活力のある村づくり	34
第5節 計画推進の方策	39

第3部 基本計画（5年計画）目次

第1章 主要指標

第1節 将来人口の予測 45

第2節 土地利用計画 46

第2章 村づくりの方向性 50

第3章 部門別計画

第1節 人と自然を大切にしたい住みよい村づくり 55
(自然環境・生活環境 関係)

第2節 人と文化を育む村づくり 88
(教育・文化 関係)

第3節 健康とあわせを誇れる福祉の村づくり 105
(福祉・健康 関係)

第4節 環境と共生した活力のある村づくり 124
(産業振興 関係)

第5節 計画推進の方策 143
(住民参画・行財政運営 関係)

第4部 資料編 160



第1部 ● 序論

第1章 計画策定の意義

原村は、平成15年12月、住民アンケート調査により合併ではなく自律の村づくりを選択しました。時代の大きな変革を受け止め、これまでの行政主導の村づくりから、住民参画に基づく村づくりに大きく舵をきって行く必要があります。

少子・高齢化や環境問題といった、社会基盤をも揺るがす大きな課題に直面する時代を迎えるとともに、価値観の多様化やライフスタイル※の変化、インターネット※や地上波デジタル化※に代表される高度情報化社会の進展により、地方と都会の関係が変化してきました。さらに、国、地方財政の逼迫により、今後の行政のあり方も問われています。

このような社会の変革期にあたり、原村としてどのようなむらづくりを進めていくべきか、今回の総合計画においては策定の過程で住民有志による「夢会議」や「ユートピア原村を語る会」、住民懇談会など、さまざまな形での住民参画による計画づくりが行われてきました。新しい計画づくりの中でさまざま議論され、今までの計画以上に住民の意見を生かし、第4次総合計画を策定しました。

※ライフスタイル ……個人や集団の生き方、暮らし方。単なる生活様式ではなく、それぞれの考え方や信念に基づいたもの。

※インターネット ……アメリカの国防技術を基に発展した、多数のコンピュータが相互に情報交換できる世界規模のネットワーク。情報をやり取りする方法を標準化し、仕様が異なるコンピュータ同士で情報交換をできるようにした。

※地上波デジタル化 ……テレビ放送の電波を、これまでのアナログ方式からデジタル方式に変更すること。全国どここの地域でも雑音や映像の乱れが少ない高品質な放送を受信することができる。また、ハイビジョン映像による高画質な映像も楽しめるようになる。



1. 計画の構成と期間

(1) 基本構想

村づくりの方向と目標を定めるとともに、その達成のための基本的な考え方を示したものです。目標年次を平成27年度としています。

(2) 基本計画

基本構想に定めた目標を達成するための施策の方向性について、分野ごとに定めた計画であり、前期5年間と後期5年間に分かれます。前期基本計画は、平成22年度を最終年度とし、後期基本計画は、平成27年度を最終年度とします。

(3) 実施計画

基本計画で定めた施策を具体化し、予算編成の指針とするものです。計画の期間は、3年間をめぐり、毎年ローリング※方式により更新を図ります。

総合計画のしくみ

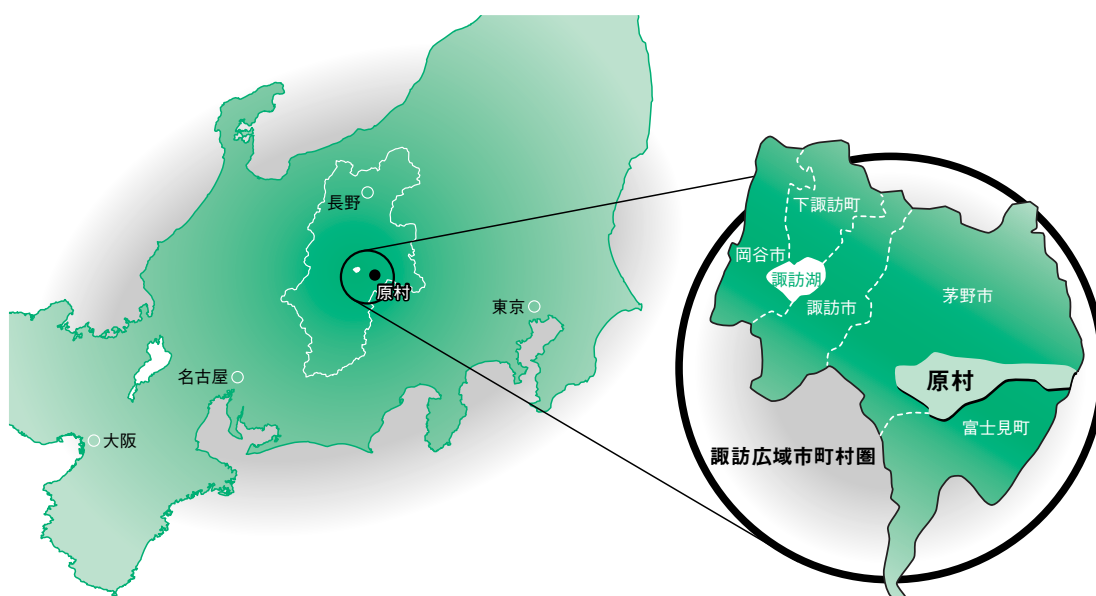
年 度	平成18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
基本構想	[Green shaded area covering all years from 18 to 27]									
基本計画	前期基本計画					後期基本計画				
実施計画 ※ローリング方式	[Grey shaded area]		[Grey shaded area]		[Grey shaded area]		[Grey shaded area]		[Grey shaded area]	

※ローリング方式 ……毎年、一定の期間をめぐりとして計画を練り直し、修正を加える方式。社会情勢や住民ニーズの変化などに、柔軟に対応するための方策。

2. 原村の概況

(1) 地勢的状況

原村は、長野県の諏訪盆地の南東に位置し、八ヶ岳連峰の西麓標高1,000mのなだらかな高原に東西に細長く広がっています。村土の4割強が森林であり、3割が農用地という、自然環境に恵まれた村です。東には八ヶ岳連峰を間近に、北に蓼科山、西に諏訪湖、そのはるか後方に北アルプス連峰を望む360°のすばらしい眺望に恵まれた、みどりと光あふれる高原のふるさとです。



(2) 歴史的背景

原村は、阿久遺跡、臥竜遺跡などに代表されるように、縄文時代からの古い歴史をもった村です。鎌倉時代から戦国時代までの長い間、諏訪氏の領地でありました。その後、一時武田信玄の領有となり、江戸時代には再び諏訪氏の治世へと戻りました。

当時、原村および周辺地域は原山と呼ばれ、諏訪明神の御狩場として、未開発の地でした。その後、新田開発が始まり慶長15年（1610年）には、原山新田が誕生した後、明治8年（1875年）には、8つの新田村が合併し原村が置かれ、その後は合併などを経ることなく現在に至っており、平成17年1月には村政施行130周年を迎えました。

(3) 社会状況

原村は、諏訪圏域構成6市町村の一つであり、北と西は茅野市、南は富士見町に接しています。農業が産業基盤の中心でしたが、近年は第2次産業、第3次産業の就業人口も増加しています。

(4) 観光状況

原村は、豊かな自然環境を活かし、観光事業にも力を注いできました。ペンション村を中心に八ヶ岳自然文化園や八ヶ岳美術館、樅の木荘、もみの湯などの観光施設が整備されています。近年の観光ニーズや旅行形態の変化により、観光地としてのあり方の変革に迫られています。

(5) 交通状況

公共交通機関は、村内に鉄道の駅はなく、最寄りの利用駅はJR中央本線「茅野駅」「富士見駅」などで、茅野駅からはバスを利用することになります。また、中央自動車道の高速バスのバス停が、村内にあります。

広域道路網としては、中央自動車道諏訪南インターチェンジが富士見町と原村の境にあり、東京都心まで約2時間、名古屋まで約2時間半程度の距離となります。また、基幹となる道路ネットワークとしては、国道20号に平行して走る主要地方道茅野小淵沢葦崎線、一般県道5路線、及び村道のエコーライン、ズームラインなどがあります。

